

種ばれいしょの安定供給に関する 対応方針について

農林水産省政策統括官付地域作物課
企画官

なか い
中井

ゆたか
豊

はじめに

ばれいしょの難防除重要病害虫である「ジャガイモシストセンチュウ」（以下「シスト」という。）が、我が国において初めて確認されてから半世紀がたちますが、まん延防止策がとられているにもかかわらず、その発生面積は年々拡大しており、その影響で、産地では種ばれいしょ生産は場の確保が困難になってきているところで

す。シストまん延防止には抵抗性品種が有効であることは知られていますが、現状3割以下の普及率にとどまっています。

このため、国が定めた「ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の作付拡大のための目標」に基づき、都道府県知事が策定する「ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種転換計画」に基づく取組を推進することにより、シスト抵抗性品種の作付拡大を推進していくこととしています。

種ばれいしょの供給体制

ばれいしょは我が国の重要な畑作物ですが、ウイルス病やシスト等の種子伝染性病害虫に侵されやすいため、その種苗は植物防疫法上の国内検疫の対象となっています。

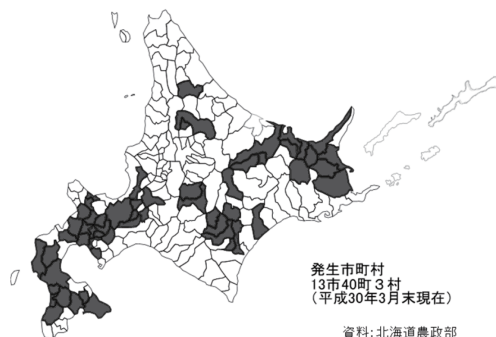
このため、種ばれいしょ生産は、農研機

構種苗管理センター、採種道県、農業団体による3段階増殖体系が整備され、それぞれの段階で植物防疫法に基づく検査を受け、健全無病な種ばれいしょが農家に供給されています。

ジャガイモシストセンチュウの発生状況

我が国において、1972年（昭和47年）に北海道後志管内で初めて、ジャガイモシストセンチュウ（*Globodera rostochiensis*）の発生が確認されました。以降、北海道のほか、青森県、三重県、長崎県、熊本県の4県で確認されています。現在、我が国の種ばれいしょ生産は場の94%を占める北海道では、56市町村（平成30年3月末現在、北海道農政部調べ）、12,000ha以上で発生が確認されており、年々その面積は拡大し

発生が確認された市町村（北海道）



ています。

このままでは、我が国のばれいしょ生産に必要な種ばれいしょの確保が難しくなる可能性があることから、対応が必要となっています。

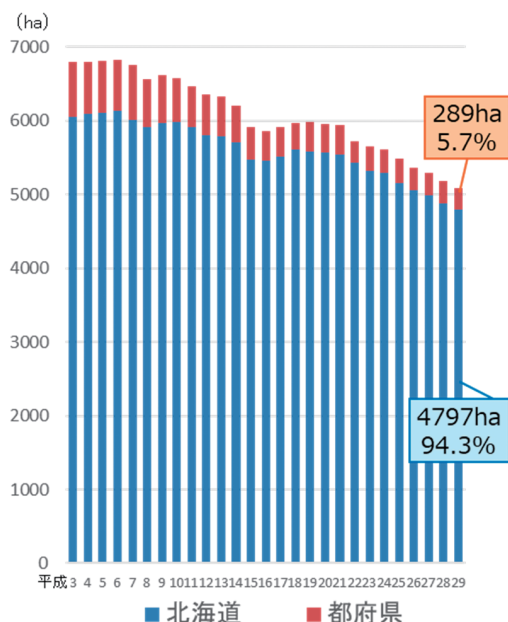
種ばれいしょへの影響

種ばれいしょの生産ほ場は、植物防疫法に基づき、植物防疫官によるほ場の検査を受け、シストなどの重要な病害虫が発生していないことの確認を受ける必要があります。

シストの発生が確認されたほ場において、再び種ばれいしょを生産・出荷することは、シストのまん延防止の観点から現状では困難であり、種ばれいしょの生産ができないほ場が徐々に増加している状況にあります。

種ばれいしょ生産ほ場における抵抗性品

種ばれいしょ生産ほ場設置実績



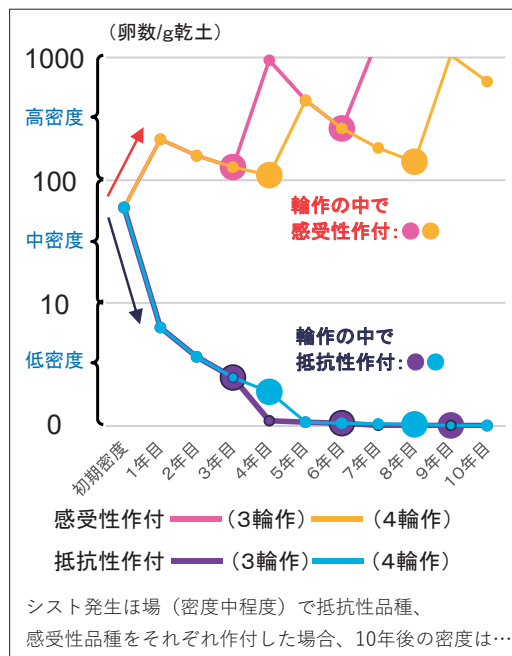
※ 原種は採種ほの合計、都道府県報告による農林水産省調べ

種の作付拡大は、この傾向を防止する効果が期待されるものの、そのためには、一般ほにおけるシスト抵抗性品種の作付拡大により抵抗性品種の種ばれいしょ需要を増大させる取組が必要です。

シスト抵抗性品種のシスト密度低減効果

シスト発生ほ場に感受性品種を作付すると、作付後のシスト密度は数倍に増加しますが、一方、抵抗性品種を一回作付することにより、作付後のシスト密度は90%程度低下するため、輪作の中でこれを数回作付することによりほぼ検出限界以下まで低減することができます。シスト発生ほ場においては、適正な輪作体系の中で抵抗性品種を導入することによりシスト密度の低減を図ることが、営農上最も効率的かつ効果的です。

シスト抵抗性品種の導入効果 (シスト密度の変化)



シスト抵抗性品種の普及状況

現在生産されている主要品種は、生食用は「男爵薯」、「メイクイン」、加工用はポテトチップ向けの「トヨシロ」、「スノーデン」、でん粉原料用は「コナフブキ」の比率が高いが、いずれもシストへの抵抗性がないことから、抵抗性品種への転換が課題となっています。

近年、加工適性、機械化適性を有し、かつシスト抵抗性等の病害虫抵抗性等を有する優良品種が育成されています。しかしながら、抵抗性品種の普及率は26%（H28年）であり、なかなか普及が進まない状況です。

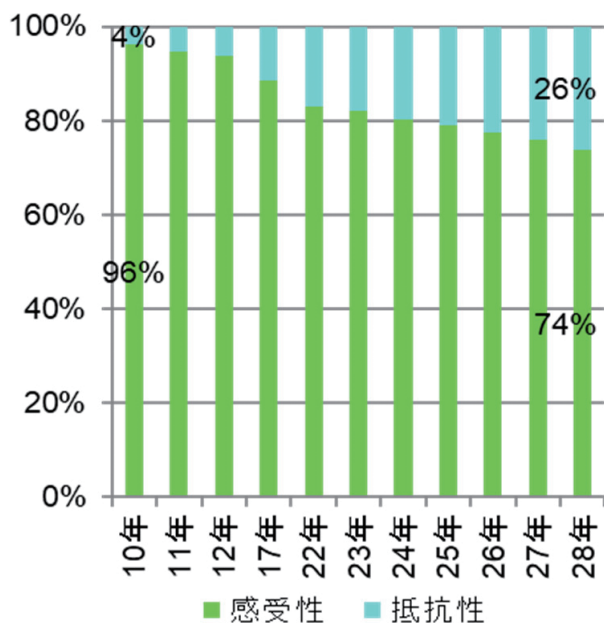
一方、でん粉原料用に関しては、北海道の産地自らが、令和4年産のシスト抵抗性品種作付比率100%を目標とした品種別作付計画を策定（平成29年度3月）し、既に取り組みが開始されているところです。

ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の作付拡大のための目標

種ばれいしょ生産ほ場における抵抗性品種の作付拡大のためには、一般ほ場におけるシスト抵抗性品種の作付拡大、ひいては抵抗性品種の需要を増大させる必要があります。

ばれいしょを生産、流通、加工、販売される関係者におかれましては、国内ばれいしょ生産の維持・継続のために、シスト抵抗性品種への転換・需要拡大にご理解ご協力いただけますようお願い致します。

シスト抵抗性品種の普及率（北海道）



「ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の作付拡大のための目標」

【主にでん粉原料用に仕向けられる品種】

- ・ 既に生産者団体が自主的に策定・実行している「抵抗性品種転換計画」に基づき、シストの発生・未発生の如何にかかわらず、2022 年度までに抵抗性品種の作付割合を 100%とする。

【主に加工用に仕向けられる品種】

- ・ シストの発生が確認されているほ場については、2028 年度までに抵抗性品種の作付割合を 100%とする。
- ・ その他のほ場については、2028 年度までに抵抗性品種の作付割合を 80%とすることを目指す。

【主に生食用に仕向けられる品種】

- ・ 男爵薯、メイクイン（非抵抗性品種）による産地化が図られていることに鑑み、シストの発生が確認されているほ場における抵抗性品種への転換に優先的に取り組み、シストの発生が確認されているほ場については、2028 年度までに抵抗性品種の作付割合を 100%とする。
- ・ その他のほ場については、抵抗性を付与した、男爵薯、メイクインに代わり得る品種の開発等を踏まえ、抵抗性品種への転換を進める。

（平成31年2月策定）